

「身近にいるって、心地よい」

川口市立西中学校 三年 田中 有紗

「毎年、ご苦労さんだね。」

私は、この言葉を聞いたたび、来年もまた来ようと思える。

毎年、七月になると私は、地域の盆踊りの売り子をする。気がつけば、七年もボランティアでやっていた。始めた当初は、まだ小学校三年生で、バレーボールクラブの活動の一環としてお手伝いをしていた。私が所属していたそのクラブは、出来たばかりで少しでも入ってもらえるように地域で行事があるたびに、私達部員が参加してお手伝いに明け暮れていた。最初は、嫌々でやっていたお手伝いも、地域の人達を助けるボランティアのように感じるようになって、いつしかやればやるほど、地域の人達の笑顔が見たくなった。

でも、それは長くは続けられなかった。私が所属していたクラブは、小学校六年生になると卒業しなければならなかった。当然、お手伝いもやれなくなる。私と同じ、卒業を迎えた子達は、もうお手伝いしなくてもいいと聞かされると、次々と歓喜したが、私は歓喜どころか絶句した。もう、お手伝いできない、地域の人達の笑顔が見られないかと思うと胸が苦しくなり、もう涙もあふれそうになった。と、その時、一人の女性が私に歩み寄って、優しくほほえんで言った。

「無理しないで。続けてもいいんだからね。お手伝い。」

見ると、その女性は近所に住むおばあちゃんだった。おばあちゃんの優しく、包み込まれそうな笑顔を見て、今まで堪えていた涙が一気にこぼれた。悲しみの涙ではなく、嬉し涙が私の頬をつたる時、いつまでもいつまでも私の腰には、おばあちゃんの腕がきつく回されていた。

「はい。」

私は、泣きながらおばあちゃんに力強く言った。その時のおばあちゃんの嬉しそうな顔はい

つまでも忘れない。

一年後、今年も盆踊りの日がやって来た。私を待っていたかのように、おばあちゃんは私に笑顔で駆け寄る。

「待ってたよ。今年もよろしくね。」

私は、笑顔でうなづく。そして、おばあちゃんもより一層、私にほほえみかける。それ以来私は、中学校に入ってもなお、お手伝いを続けた。今も、これからも。

最近、私と同じくらいの年の子達はあまり地域の人と交流しないと、よく耳にする。

そんな人達には、この作文を通して伝えたい。自分では気づいていなくても、地域の人達はあなたを見守ってくれている。だから、恥ずかしがらずに、一言声をかけてほしい。そうすれば、身近にある優しさに気づけるから。